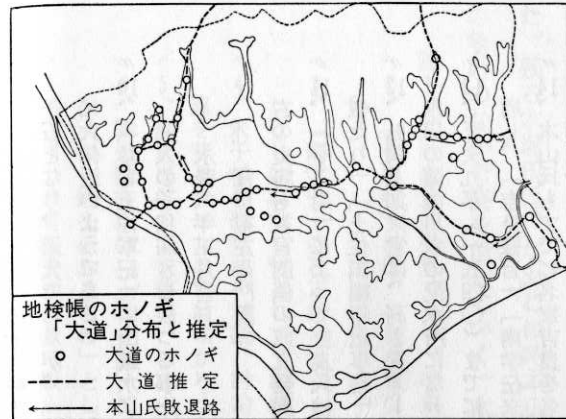


長宗我部、本山両氏の争覇

長宗我部、本山両氏の争覇 本山氏が南下して朝倉城を占拠、ついで吉良氏を滅ぼした後、さらに吾南平野および高東平野より一條氏を駆逐し、ついに浦戸城（高知市）にまで進出したことは前述したが、本山氏の土佐国中央部支配も長くはなかった。有為転変の激しい戦国時代であったから



である。永祿年中ついに本山氏は西から一條氏の反撃をも受けたが、とくに東よりの長宗我部氏の攻撃は急激かつ苛烈であって、本山氏の敗退となり、土佐国中央部は完全に長宗我部氏の手中に帰する。主として左表に示すように、この争覇戦は永祿前半のことであった。本山氏の抵抗反撃も強烈であって、両者の激突した永祿三年（一五六〇）五月の長浜の戸の本、同若宮における戦いは、戦国武将長宗我部元親、親貞兄弟の初陣であり、また同五年（一五六二）九月の朝倉、神田、鴨部（以上高知市）の戦いも、激烈を極めたものであった。本山氏に勝って、長宗我部氏ははじめて土佐一国を手中に収めることができたのであって、いわば武将長宗我部元親の試金石であった。以下一覽表を見ることにしよう。

弘治二年（一五五六）長宗我部国親が、本山麾下の秦泉寺掃部を敗亡さ

せたのが衝突の開始であるが、両者とも一時慎重で動かなかった。その後

永祿三年（一五六〇）頃、本山勢浦戸湾にて長宗我部氏の粮運船略奪、衝突開始。

同 同 国親長浜城を陥れる。

同 同 長浜雪隠寺前戸の本の戦い、元親初陣。

同 同 長浜若宮の戦、親貞奮戦。

同 同 本山茂辰浦戸城退去朝倉城に入る。

同 同 潮江、国沢、大高坂（以上高知市街部）長宗我部氏に降る。

同 四年（一五六二）頃井口、比治（高知市西部）長宗我部氏に降る。

同 同 吾南各地長宗我部氏に降る。

同 同 大黒一族朝倉庄（高知市朝倉）の麦を薙ぐ（焼却）。

同 同 本山氏吉成与三郎をして恋の森城（高知市）を守らしめる。

同 同 本山麾下の神田、石立（高知市西南部）の城主ら敗走する。

同 同 朝倉城下および鴨部、神田にて本山、長宗我部激突、勝敗決せず。

同 六年（一五六三） 本山茂辰朝倉城を焼却、領家（高知市）をへて本拠本山城（本山町）に退去。

同 同 本山氏の一部隊一宮庄（高知市）を焼打、土佐神社炎上する。

同 七年（一五六四） 長宗我部氏本山城攻撃、本山氏ついに本山城を退去、北方瓜生野（本山町）に籠る。

元龜二年（一五七二） 本山氏降伏、滅亡。

以上は主として、「土佐国編年紀事略」によって整理したものであるが、その間長宗我部国親はまず永祿三年（一五六〇）六月死去、また本山茂辰も同六年頃（一五六三）敗戦の痛憤の中で死ぬる。本山氏はまた同三年（一五六〇）蓮池城（土佐市）を一條氏に奪回される。一條、長宗我部の合意によったもので、本山氏は腹背に敵を受け

たことになる。長浜敗北ですでに士氣沮喪した本山勢は、一條勢に対し、「防がんとする兵一人もなく我先に我先にと落行きける」「古城伝承記」という。もっともこれは多少本山に対しては不当であり、長浜城あるいは朝倉城付近の戦いは、土佐戦国期最大の激戦であり、長宗我部氏をいたく苦しめたものと云えよう。長浜戦後の国親の死も無関係とは思われない。

さもあらばあれ本山氏は、三カ年の死闘の後、ついに朝倉城を放棄退去した。その原因の一つに、吾南地方の生産力豊かな農村の失陥があったのではなからうか。以下いよいよ春野地方に焦点を絞って、本山氏退去の姿を追ってみよう。主として永禄四年（一五六一）のことであった。

本山氏吾南を失なう 吾南地方の、当時における動きを伝える貴重な史料が四つある。いずれも原史料はすでに無いが、「土佐国編年紀事略」等に、採録されたのは好運であった。また軍記物にも「土佐物語」等若干伝えられたものがある。これらを勘案して綴ることにしよう。まず日付に従って、

名字の事橋本に任候。弥虎口心懸肝要に候也。

永禄三年七月十二日

茂 辰

橋本甚兵衛とのへ

これは「土佐国蠹簡集」に収められたもので、所蔵者は秋山村庄屋であった。また七月といえは、長浜合戦から二月たらずである。「虎口」とあるように、吾南平野には、長宗我部氏の勢力が本山氏を圧してひしひしと迫っている。本山茂辰は家僕を武士に召し出し、秋山城の防戦を令したものである。つぎに、翌年になれば、

連々機遣比類無く候。然は弓箭存分の上にて、一町五段扶持すべく候。弥忠節仕るべく候者也。

永禄四年三月十五日

元 親

堀内九郎右衛門かたへ

この文書は東諸木村庄屋堀内市之進所蔵で、「土佐国編年紀事略」の筆者は、この時点で「元親東諸木まで蚕食し、芳原以西はまだ茂辰に従へり」としている。右の堀内九郎右衛門は東諸木城一砦一主と考えられ吾南の風雲はいよいよ急である。これを受けて立つかのように奇しくも同日付で、

光清定番仕るべき由比類無く候。褒美として五段申付くべく候。弥心懸肝要に候也。

永禄四年三月十六日

茂 辰

堀内源左衛門との

また、

光清定番仕るべきの由、比類無く候。褒美として、六段申付くべく候。弥心懸肝要に候也。

永禄四年三月十六日

茂 辰

島田善左衛門とのへ

右の「光清」城は「土佐国蠹簡集」によれば、「吾川郡吉原村に在り、善左衛門は九左衛門祖父也」とある。この地東諸木、芳原の境界が同時に本山、長宗我部両勢力の境界であった。

こうした両勢力必死の対立の中で、雀が森城主高橋孝岐守（一説徳弘円也）も没落したと思われるが、永禄三十五年（一五六〇〜六二）と年は過ぎたが、その間両勢力の小競合いは間断なく続く。「さる程に爰の乱妨、彼処の放



雀が森城跡(東諸木)

